

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02392

研究課題名（和文）学習者の主体性と深い学びを支える教師の授業遂行能力に関する実証的研究

研究課題名（英文）Study of practical lesson skills to enhance student's independence and learning

研究代表者

大和 真希子（Yamato, Makiko）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・准教授

研究者番号：60555879

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学習者の主体性を支え、思考活動を精緻化するための教師の見とりと介入の効果を実証するため、福井県と大阪府の小・中学校、高等学校の計8校の授業実践を分析対象とし、複数の教師の授業計画力と授業実践力の関連を明らかにした。

学習指導案や資料の検討や発問・板書計画の吟味を行い、教師へのインタビューを通じた児童・生徒観を抽出し、実際の学習場面での見とりと介入の関連を実証した。その結果、学習者に問いを持たせるために、発問や板書計画だけでなく、学習内容と生徒の思考状況、つまずきをイメージする教師は、授業で学習者の思考の浅さを見取り、議論を精緻化させる介入を豊富に行っていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで、教師のコミュニケーション研究が照射してこなかった授業計画段階と遂行段階の関連を抽出し、授業内のアプローチのみならず、教師の認識や準備状況等の要素から多様で複雑な授業力を可視化できたことにその価値がある。教師と学習者、学習者同士の対話場面に限らず、授業全般における教師の多様な介入とそれを支える「見取り」、学習課題、授業プリント、板書等の多様な要素から、効果的な学習場面がどのように生み出されるのかを明らかにできた。また、高等学校を研究対象に含んだことで、より高度な学習に不可欠となる生徒の思考の深化、義務教育段階をベースとした討論や議論の質を見取る教師の授業力の内実を把握できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we clarified the effects of teachers' observation and intervention to support learners' independence and elaborate their thinking activities. We analyzed the classroom practices of a total of eight elementary, junior high, and senior high schools in Fukui and Osaka prefectures, and clarified the relationship between the lesson planning and classroom practice skills of teachers. First, we examined instructional plans and materials and questions and board plans; next, we elicited students' and their perception of students through interviews with teachers; and finally, we demonstrated the link between observation and intervention. The results revealed that teachers who imagined the learning content, students' thinking situations, and stumbling blocks, as well as the questioning and board plans, in order to make learners ask questions, were rich in interventions in their lessons to identify the shallowness of learners' thinking and to elaborate on their arguments.

研究分野：教育学

キーワード：教師の見とりと介入 学習者の主体性 授業計画力 授業実践力 生徒の思考力

1. 研究開始当初の背景

学校現場では、「教科を超えた言語活動の充実」を進化させる形で「アクティブラーニング」や「ディープラーニング」が取り入れられつつある。新しい学習指導要領でも、児童・生徒に協働性とともに、自身の思考・意見を踏まえて論述できる力を求めている。こうした動きは、自身の思考と認識を言語化し、他者と共有するだけでなく、獲得すべき概念や方法的知識を顕在化する機会を学習者に保証することにつながるため、教室でかれらが他者とともに学ぶ効果を量・質の両面において高めるにちがいない。

だからこそ、児童・生徒の主体的かつ協働的で深い学びを支え、促し、高める教師の役割が極めて重要となる。このような教師の役割については、発話を精緻化する「リフレクティブ・トス」(Van Zee, E., & Minstrell, J. 1997) をリヴォイシング、児童が学び合う授業や議論の活性化に必要な教師の談話方略(高垣ら 2006・2014、尾之上ら 2011)、教師の非言語行動と学習者の意欲との関係(古城 1982、蘭・内田 2005)等によって実証されてきており、教師の効果的なコミュニケーションをめぐる知見は豊富である。

これに対して研究代表者らは、教師による「リヴォイシング」や「談話」を分析するだけでは、教師の「授業力」の全体像を詳細に捉えることが不可能と考え、より包括的な視点から、学習者の発話や読解力を向上させる即時的な教師の言語・非言語的インターベンションの効果検証(松友ら 2012)や、効果的なインターベンションを支える教師の長期的・分析的な状況の見取り(状況解釈や思考)の抽出(松友ら 2014、大和ら 2015)、学習者の年齢や校種による介入や見取りの違いを実証してきた(大和ら 2013、大和ら 2017)。しかし、われわれも研究開始当初は、次の課題を克服できていなかった。

まず、分析対象が授業内での「教師と学習者」や「学習者相互」の対話場面に限られ、教師の力量も「授業内での学習者の変容」を通して実証に終始しがちであったことである。ゆえに、授業の計画力、授業を構成する細かな学習場面での多様な介入、学習者に対する教師の認識は分析の観点から漏れ落ち、これらと実際の授業内でのコミュニケーションとの連関が不明確であった。2つ目は、主な研究対象が小・中学校に占められ、学習の難易度が増す高等学校での実証はなされていないため、学校段階で異なる教師の専門性と授業力との関連を掴みきれなかったことである。

2. 研究の目的

こうした状況から研究代表者らは、優れた授業を遂行する教師の力量を、授業実施前における計画力(効果的な学習場面を構想する能力)と授業実践段階における学習場面のマネジメント能力(効果的な学習場面を生み出し展開する能力)と捉え、両者の往還によって授業で多様な学習場面を生み出し、深化・拡充させていくために不可欠な力量として教師の「インターベンション」と「見取り」を位置づけた。

そして、本研究では、小・中・高等学校の授業で生起する様々な学習場面を事例として抽出し、教師の計画性や授業に対する認識、教科の専門的知識、教職経験、学習者の変容との関係进行分析・考察することによって、効果的な「見取り」と「インターベンション」の内実を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

まず、分析対象となる教師の授業計画力（授業指導案、発問や板書計画、掲示物・配布物の準備、活動の設定・タイミング、学習者・授業に対する認識、学力への理解）を明らかにし、教師の認識と計画性との関連を中心に分析した。

第2に、授業全体において、教師の「見取り」と「インターベンション」の連続性がどのような学習効果を生み出しているのか、特に、学習場面にいかに協働性が生み出されているのかに焦点化し、教材や教具、プリントや板書等がそこにどう寄与し、実際の授業で生起する学習場面との関連が見いだせるのかを集中的に分析・考察した。同時に、学習場面の「構造」を、教師の「見取り」と「インターベンション」、教材、教具、学習プリント、板書などの観点から分析し、学習場面の質を生み出す背景も明らかにした。具体的な方法としてはビデオカメラ3台による多方向からの記録（教師・学習者・教室全体）し、授業後は授業カンファレンスにおける教師との対話データの集積を行った。

効果的な学習場面を生み出す教師の計画力・実践力と、各学校段階で異なる教師の専門性との相関を明らかにした。

4. 研究成果

研究代表者らは、上記の方法で研究を実施し、学習者の状況を適切に見取り、介入するための教師の力量を授業計画・実施段階から可視化しようとしたが、2020～2021年度にかけては新型コロナウイルスの影響で研究を進捗させることができなかった。しかし、2022年度には、教師へのインタビュー調査に再度、着手することができ、最終的には福井県内と大阪府（高槻市）の小・中・高等学校で8名の教師を対象に、教師の教材解釈や児童・生徒観（学力への理解や学習意欲、学級への適応度の把握）によって教師の解釈や判断が変わること、そしてそれが、授業中での具体的な思考を支える介入につながっていることを明らかにできた。

また、効果的な学習場面を生み出す教師の授業計画力と授業実践力の関連だけでなく、各学校段階で異なる教師の専門性との相関を明らかにすることができた。特にこれまで対象としてこなかった高等学校において、生徒の論理的表現力や議論を支え、思考を誘発する授業実践を展開する教師に焦点を当て、その教師の「見取り」を支える授業観、指導観、学習者観の特徴、相互の関係性を抽出できた成果は大きい（福井県立大野高校、敦賀高校、羽水高校での調査から）。調査対象となった教員の授業計画の分析からは、かれらが説明や指示だけでなく、生徒に問いを持たせるための準備（発問や板書）を基軸に、掲示物・配布物と生徒の思考のつながりをイメージし、生徒自身が理解できたことを振り返るための資料を活用する意図も見いだせた。そして、実際の授業では、それらの準備をもとに、実際の授業で生起する学習者のつまずきや思考の浅さを詳細に見取り、それを補い、生徒自身に不十分さを理解させるための介入が豊富になされていたことを明らかにできた。

さらには、小学校での基本的な学習規律や他者意識の獲得、そして、中学校および高等学校での論理性の高い発話や深い思考の獲得を促進させるための教師の見取りと介入の連関を可視化できたことも、本研究の大きな成果といえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩田康之・米沢崇・大和真希子・早坂めぐみ・山口晶子	4. 巻 3
2. 論文標題 規制緩和と『開放制』の構造変容 - 教員養成・採用をめぐる行政施策を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京学芸大学次世代教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大和真希子・松友一雄	4. 巻 47
2. 論文標題 小学校入門期の授業における教師の見とりと介入の効果に関する研究 1年生児童の能力形成の起点に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福井大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩田康之・早坂めぐみ・藤田里実・大和真希子・山口晶子・米沢崇
2. 発表標題 規制緩和と「開放制」の構造変容 - 教員養成・採用をめぐる行政施策を中心に
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松友一雄
2. 発表標題 教科指導に係る教師の実践的力量形成（公開シンポジウム）
3. 学会等名 日本教師教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松友一雄 (長田友紀 山元隆春編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 205
3. 書名 新教職課程演習第10巻 初等国語科教育	

1. 著者名 松友一雄 (甲斐雄一郎 間瀬茂夫 編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 239
3. 書名 新教職課程演習第16巻 中等国語科教育	

1. 著者名 岩田 康之 KIM Minah 早坂めぐみ 大和真希子 山口晶子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 208
3. 書名 教育実習の日本的構造	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松友 一雄 (Matsutomo Kazuo) (90324136)	福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成)・教授 (13401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------